

カトリック センター便り

第7号
平成25年
6月13日

教会の暦は、三月末日に復活祭を祝い、七週間後の五十日目・聖霊降臨祭をもって復活節を終了し年間に入っています。カトリック教会は、五月をマリア様の月、六月を聖心(みこころ)の月と定めています。

6月は **みこころ 聖心** の月

聖心について

聖心とは、神様のあつたかい心・ハートのことです。三位一体の神について聞いたことありますよね。神は、御父、御子、聖霊のお三方でありながら唯一の神であるということなのです。

ですから聖心とは、御父の心、御子イエス・キリストの心、聖霊の心でもあります。その心は、もちろん冷たい心ではなく、あつたかい愛の心です。

芸術家が何か創ろうとするときどんな心でそ

今月のみことば

神が御子を世に遣わされたのは、世を救うためではなく、御子によって世が救われるためである。(ヨハネ3・17)



の作品を創るのでしょうか。おそらく憎らしいと思つて創る人はいないでしょう。

神はこの世のものを創る時、愛をもつて創りました。特に人を創る時には、ご自分に似せて人を創ろうとおっしゃっています。神様は、人間も神の愛の交わりの中に入つて、幸せになるようにと望んで私たちを創りました。私たち一人ひとり、例外なく神様から愛されています。聖書の随所にその愛の心が現われています。放蕩息子の子のたとえ話(ルカ15・11)もその一つです。

今わたしたちにもできる愛の実践

JOC S(日本キリスト教海外医療協力会)

では、アジア・アフリカ途上国の保健医療分野で働く「働き手」の奨学金のために、次のものを集めています。

- 使用済み切手
- 書き損じはがき
- 外国コイン、紙幣
- 未使用のはがき、切手



カトリックセンター(R103)のポストに古封筒などに入れてご提出ください。

学内探訪 名画をたずねて

放蕩息子の帰還

レンブラント

新約聖書、ルカの福音書15章の「放蕩息子のたとえ」の中の、息子の帰還を父親が受け入れる場面をレンブラントが描いたものである(17世紀)。現在、サンクト・ペテルブルグのエルミタージュ美術館が所蔵展示している。

父親の財産の生前贈与を要求し、贈与された財産を遊びで使い果たして身の置き所を失った息子が裸同然の姿でもどつてくる。弟の愚かな行いをとがめようとする兄(右側に立っている)とは反対に、父は、息子を温かく迎え入れる。レンブラントは、様々な勝手を尽くす人間の愚かさや弱さに対する神の愛の深さと寛大さを、息子の肩に置かれた父親の両手に込めている。



F館3階のホールにあります

カトリックと私 (5)

「なぜ、いま、自分はここにいるか」

学長 吉川 武彦

辞令四枚をもって飛び歩いた日々

「聖母マリア幼稚園」に通わせていた子どもたちを引き連れて、また転居。こんどは千葉県市川市にある国立精神衛生研究所、通称「精研」への転勤である。いまはこの研究所は東京都小平市に移転しているが、当時は千葉県市川市国府台にあった。国府台には国立国府台病院があり、すでに総合的な病院として大きくなってはいたが、もとはといえば陸軍病院で、精神科を主体にする病院であった。この病院の敷地の一角に1954年、昭和29年に呱呱の声を上げたのが国立精神衛生研究所である。

前述したように、加藤正明精神衛生部長からのお誘いを受け、国立下総療養所に勤務する傍ら精研の勤務をこなしていたが、ポストが空いたというので正式に研究所職員として勤務することになった。またまた子どもたちの幼稚園探しをしなればならなくなったがもう慣れたもの。とはいえ、ご近所にはカトリックの幼稚園はなかった。長女は小学校に入学したので長男は近くの幼稚園に入れ、下の子2人は保育園にお願いすること

にした。

ここでも子どもが多いからということでも格の上の官舎をいただくことになった。官舎は研究所の敷地のなかにあり、私の研究室からも見える。門柱がきちんと立った門があつて屋敷の中にはいるようになっていた。庭もかなりの広さがありここで野菜づくりをした。大きな鳥小屋を買い求めてせきせいインコなどの小鳥を10数羽飼ひ、大きな水槽でグッピーを育てた。門柱を結ぶ梁の上に子どもの靴がずらりと干してあるのを研究室の窓から見ていたことを思い出す。夕方になると「おとくさま。ご飯ですよ」と娘や息子が大声で言うのを聞くと「お、すぐいくよ」と答えて3階から降り、家族一緒に食事をした。食事が終わって子どもを風呂に入れてからまた研究室に戻り真夜中まで籠っていた。

研究所に本籍が移るまでは、国立下総療養所医師が本籍、国立精神衛生研究所研究員を併任、厚生省公衆衛生局精神衛生課課長補佐を併任、国立国府台病院心身症センター医員を併任というわけで4枚鑑札、というよりも座るべき机と椅子が4か所に用意されていた。療養所から研究所に転じたときに鑑札は3枚に減ったが、それでも1日の生活は日によっては早朝には研究所に出勤しデイケア関係の申し送りを受け、9時から診療を始める国府台病院で外来診療を2時過ぎまで続け、終わると食事もせずに霞ヶ関に飛んでいき課長補佐業務を夜中の11時までするというアク

ロバットな生活だった。

厚生省課長補佐という役職は、全国を飛び回らなければいけなかった。とくに1972年5月の沖縄の本土復帰を目前にして、法制度の整合性を図ることや施設整備に関するなどで厚生省はてんでこ舞いだったが、それが私と沖縄を結びつけた。

琉球大学からお声がかかった

当時の用語でいうと「精神衛生行政」という切り口が沖縄とのつながりであったが、関係が深まるにつれ、琉球大学へ転ずる話が出てきた。その頃、田中首相のお声掛かりで「各県1医科大学構想」が進められその最後が沖縄県だった。こうして琉球大学に医学部をつくるというプロジェクトに巻き込まれていったのである。さすがに軽トラック1台では転居できなくなっていたので引越し荷物は別送し、子ども4人をつれて車で東名を走り、大阪から沖縄行きのフェリーをつかまえ、那覇港に着いた。これまで同様、私が沖縄に先乗りしているの転居、従って私はすでに半年ぐらい沖縄生活をしていた。

沖縄はまだ右側通行だったので、那覇空港までは右側通行で、羽田で迎えに来ていた家内と交代して左側通行で運転するというのもしてきた。だが、家内が沖縄2日目に車で市内に出かけたとき聞いたときにはびっくり仰天した。「まあ、こんなつれ合いだから仲良くやってきたのかな」など

と独りごちるしかなかった。琉球大学が用意してくれた官舎は「医官宿舎」と銘打った4階建て、8畳、6畳、4畳半の3部屋に広いリビングがあった。「豪勢」なものだった。これまで住んだこともない部屋なので「運動会ができる」と子どもたちは喜んだ。仕切りの襖を外すと三角ベースの野球もできた。

間もなくそこを追い出されるのだが半年ぐらいは楽しい思い出をつくってくれた官舎である。出る羽目になったのは、私は教育学部に転じることになったからである。当時の文部省は障害児教育の充実を図るために、教員養成に当たって医師の教員を得るよう指導をしていた。そのアンテナにかかってしまい、障害児教育学科主任教授ということで教育学部に転じることになった。大学当局は、医師の資格はあるが「医官宿舎」に住む権利はないと強くいうので街中にアパートを借りて住むことになった。

与那原修道院とシスター稲嶺との出会い

捨てる神もあれば拾う神もあるということわざ通り、家を探してくださいと巡り会い北中城に家を求めることができた。頭金を払うと一銭もなくなるという状態だったが、それはかつて駒ヶ根を離れるときに駒ヶ根の土地を買うようにと言われたときに貯金のすべてを払い出して買ったあのときそのままに、この家を買うことにした。ここでもそれが幸いして、地元の方々のお

つきあいが深まった。

そんなある日、北中城の家から南に下がる太平洋岸を走る国道に子どもたちを乗せて遊びに出た。復帰後は国道58号線といわれるようになった。「1号線」ほど整備はされておらず、あちこちに舗装がはげている道ではあったが楽しいドライブをした。そのドライブの最中に見つけたのが「与那原修道院」である。修道院は「与那原教会」に附属していた。家内はすでに述べたようにカトリックの信者、まったく見知らずの沖繩に来てやはり不安だったのであろう、この教会と修道院に出会ったことを神のお導きだと感じたようである。子どもたちをつれておそるおそる教会に入ってお祈りをしているところに現れたのがシスター稲嶺。私たちの姿を遠くからご覧になっておられたのであろう、そっと近づいてこられ「神さまはいつでもあなた方のそばにおられます」と告げて下さった。

出会いが劇的だっただけに、その後のおつきあひも急速に深まった。週末になると北中城の家から車を駆って4人の子どもたちを与那原教会に連れて行った。子どもたちはまだ小学校5年、4年、1年と幼稚園年長、小学校5年の長女はともかく、下の男の子3人はまさにやんちゃの盛り。教会に行くにあつち隠れたりこつちに隠れたり、教会のなかを駆けめぐっていた。シスター稲嶺はそれをいつもにこに見ておられたし、ときには一緒にかくれんぼもして下さったしそれと

なく神さまのお話も子どもたちにされた。

神父さまからの突然のお電話

精神科医が足りないときであったので那覇市与儀にある琉球大学附属病院に勤務する傍ら、沖繩県内の病院で診療をせざるを得ない状態だった。そのひとつ、平安病院で出会った高校生、彼は「自分は男じゃない。女だったはず。お母さんがつけ間違っちゃって、男になっちゃった」という、自分の性を受け入れられない、精神医学的には「性同一性障害」のお子さんだった。私自身はかなりこの類のケースを診ていたということもあって、このお子さんの担当になった。精神療法と生活条件の改善などを柱にして本人はようやく「ぼくは男だったんだ」という認識を得ることができて治療関係は終わった。

ある日、自宅でごろごろしていると「与那原教会の神父ですが」という電話が飛び込んできた。子どもたちがなにか悪さをしたまま帰ってきたのではないかとあわててお話を聞くと「いえいえ、そういうことではございません」というお話。なんと先の高校生、すでに卒業して社会人になってはいましたが、その彼が教会に来て不安を強く訴えるということだった。「なぜ私のところにお電話を・・・」とその神父さまに問うと「いえ、盛んに先生のお名前がでてきますので、シスター稲嶺にお聞きして・・・」といわれた。この神父さまに「私がすぐに行く必要がありますか」

とお聞きすると、直ちに「それほど切迫した感じではありませんから、修道院にしばらく泊めて上げようと思う」という話で、「もしもそれで落ち着かないようだったら、こちらまで来てくださーい」ということだった。もう高校生ではないこの青年とは、後に道でお会いしたことがあるが、お互いにちよつとした仕事で挨拶をしただけで、すぐに分かれたのを最後にお会いしてはいない。

神父さまと私をつなげてくださったシスター稲嶺はいつも私たちのために教会のなかで栽培しておられた南国の果物、パッションフルーツを冷やしておいて下さった。私たちはいつもそれをごちそうになり、種を持ち帰って蒔き、家の裏に物干しに絡ませて育てたが教会でいただくような実はなかなかつかなかった。そのシスター稲嶺は、その後、請われてブラジルに行かれ、彼の地に定住された。

Quo vadis、 Domine? (クオ、ヴァデイス ドミニネ?)

ローマ帝国におけるキリスト教徒への迫害が激しくなり、虐殺を恐れた者たちは次々と国外へ脱出した。聖ペトロは周囲の人々の強い要請によりローマを離れるのに同意、アツピア街道を歩いていたときイエスの姿を見た。そのとき聖ペトロは驚き、思わず口にした言葉とされている。「主よ、何処(いづく)に行き給う?」と訳されてきたと思う。

いま私は、この「Quo vadis、 Domine?」を「自分は、いったいどこに行こうとしているのか」と自分自身への問いかけの言葉としている。このエッセイ「カトリックと私」に「なぜ、いま、自分はここにいるか」という副題をつけたのはそのためであった。まずもって「なぜ、いま、自分はここにいるか」を明らかにし、そして「ここから、どこへ行こうとしているか」を自分に問いかけたからである。冒頭に述べたように、私はキリスト者ではない。あの内山神父さまにお伝えしたように「私は人を信じている」だけである。人を信じてきたからこそ精神科医を続けてこられたと思っている。

だがその内山神父さまに導かれてここまで来たような気もする。こうして清泉女学院の一員になるにはなにかのお導きがなければならなかったであろうし、それなくしては自分の自分はなかったであろうと思うとそれを単なる運命論で済ますわけにはいかないと感じた。それがこのエッセイを書くことになった動機である。表題を「カトリックと私」としたので、私はこの清泉女学院に勤務するひとつ前の勤務校、中部学院大学のことには触れなかった。この中部学院大学はキリスト教系の大学で、「神を畏れることは、知識の始まりである」という言葉を建学の精神として掲げているプロテスタントの大学である。

キリスト者でない私ではあるが、ここまで書き綴って来たように、まるで神に導かれるごとく生きてきた。そしてその御心のままにキリスト教系の大学に勤務することになりいまの自分がある。それだけに「クオ、ヴァデイス?」と自分に問いかけたくなった。ちなみに、この「Quo vadis、 Domine?」という言葉を始め知ったのはラテン語を自学自習していたときである。ラテン語を学びたてだったので「あなたは、いづくに行くのか」と訳していたように思う。そのころ Domine という言葉が「主よ」という呼びかけとは知らず「あなたは」あるいは「汝は」という呼びかけだと理解していたからである。そして「Quo vadis、 Domine?」は、私のなかでは「汝は、いづくに行くのか」という自問となってきた。導かれてここまで来たが、これからどこへ行こうとしているのかという自らへの問いかけをいまもお自分にし続けているのが、いまの私である。

(2013年4月19日 完)

いずこへ?

